

文樂座

# 初番の秋篠狸稿



# 文樂座

四ッ摺畔



# 謹賀新年

大政翼賛のもと一億國民が大躍進を爲す可き新らしき年の始めにあたり當座に於ては健全なる娛樂を通じての日本精神昂揚の實を擧ぐることに更に一層の努力と精進を拂ひ愈々四方皆々様の御期待に添ふべく茲に初春本格興行の運びに立到り候次第に御座候就ては此度は曩に今事變に於て我海鷲の華と謳はれたる山内中尉と其母堂の忠烈なる事蹟を追想して美はしき物語を上演するを始めとして當座秘藏の名狂言を配列いたし迎へる意義深き新年を壽ぐ事と相成り一座連中に於ては一層の報國精神に燃えて必死の奮闘を以て御意を得可く候間何卒舊年に倍して御眞御引立の程を伏而奉御願申上候

昭和十六年元旦

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十六年一月一日初日

元旦より五日まで午後二時開演  
毎日午後三時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

〔一等御座席〕は五日前より  
〔一等椅子席〕

前賣切符發賣致居候

前賣切符

專用電話

南①四七壹番

一般御用

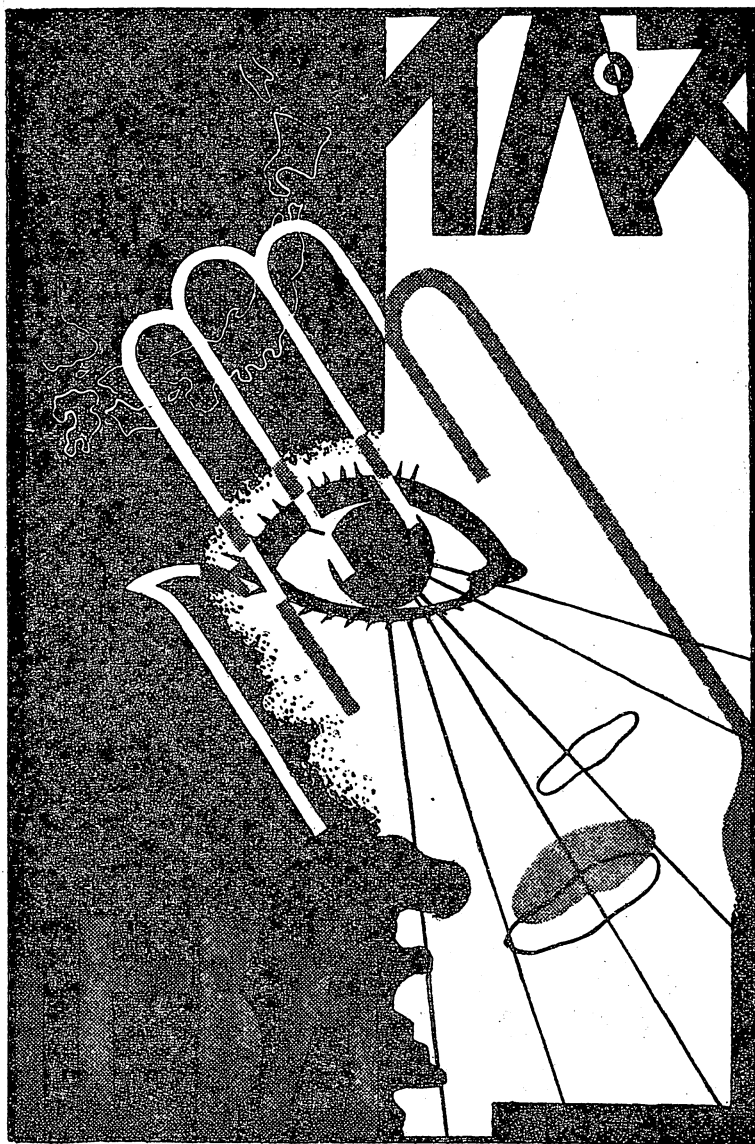
南②三〇三番

の電話

南③三七八番

お草履の準備は御座のますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

公奉域職・踐實道臣



國民精神總動員

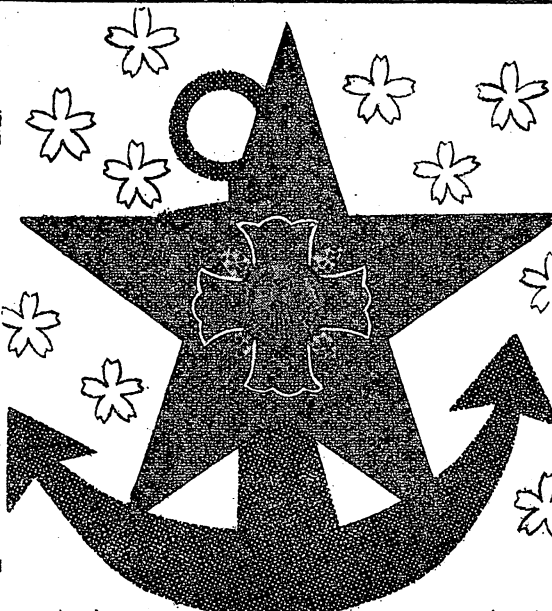
臺灣總督府

第一號

臺灣總督府



國を護つた  
傷兵護れ



傷兵保護院  
國民精神總動員中央聯盟

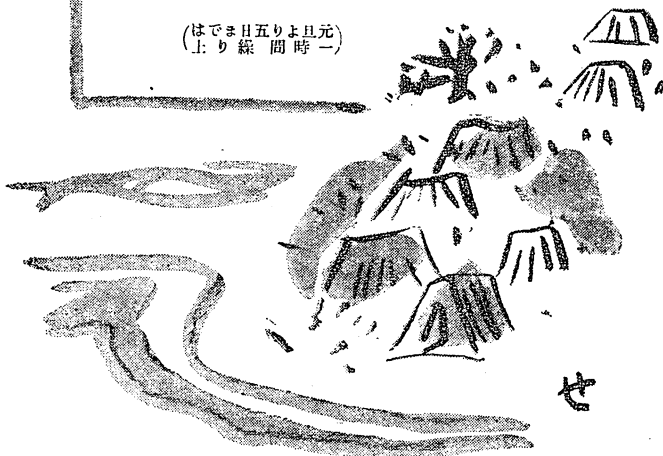
# 初春の形浄瑠璃

毎日午後三時開演 元旦旦初日  
 元旦より五日まで午後二時開演

演出總形人・線味三・夫太

三 場	軍 隊 代 唱 萬 歲 母 書 簡	忠 兵 衛 川 冥 途 の 飛 脚	御 所 櫻 堀 川 夜 討	義 士 銘 々 傳	釣 女	伽 羅 先 代 萩	壽 柱 立 萬 歲
	淡路町龜屋内の段 羽織落しの段	辨慶上使の段	赤垣出立の段		政岡忠義の段		
	九時五十分より (打出し)	八時十分より (幕間)	七時十分より (幕間)	五時五十分より (幕間)	五時十分より (幕間)	四時三十分より (幕間)	三時二十分より (幕間)

(はでま日五りよ旦元)  
 (上り線 間時一)



せ

# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は

永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ動て作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは、三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから



の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜粋)



壽 柱 立 萬 歲

鶴	鶴	豊	竹	竹	豊	才	太
澤	澤	竹	本	本	竹	三	夫
友	叶	富	土	松	竹	豊	竹
平		太	佐	島	辰	伊	和
		夫	尾	太	太	勢	泉
			太	夫	夫	太	太
			夫	夫	夫	夫	夫

壽 柱 立 萬 歲

(床本) 壽柱立萬歲

よき事は卯の年にとぞあら玉の初の詣でや諸人の壽き祝ふ萬歳が勇み喜び立出て色にやかしこきそれ様なれどなじようさつしやれエ戀しらず、イヤ悔むな其所へ氣のつつかぬ大夫ぢやなけれど何れも様へ改めて御祝儀申し入れますと足を早めて來りけるぬらは御祝申すと鼓追取聲繕ひやんら目出度やなア鶴は千年の名鳥なり龜は萬年の御壽命保つ鶴にも勝れ龜にもます今日此お家をば長者がしんと祝い榮やましんます建初めの柱をば綾と錦で包んませて弓と箭をばつけさせて之が火防の柱とて鬼門を守らせ候へける。一本の柱は一チンの宮よ二本の柱は二千だり、三本の柱は櫛の明神、四本の柱はシロタヤ天王、五本の柱が午頭天王、六本の柱は六八幡とや、七本柱が七尾天神、八本の柱がい正八幡、九本柱は熊野の三社の大権現とヨナ、十本の柱は十かせつ、十一本の柱をばヨナ一面觀世音、十二本の柱をば藥師の十二神とや

人形役割割

壽柱立萬歳

太夫 吉田光之助  
才三 吉田文作

鶴澤友叶太 鶴澤友叶太  
豊鶴澤新友太 豊鶴澤新友太  
豊野澤廣吉 豊野澤廣吉  
豊竹澤龍團仙 豊竹澤龍團仙  
市作松 彌藏 郎郎 作郎

千本餘りの柱をば御取立て悦こばれんなら誠に目出度く候へける。みろく十年辰の年諸神の立てたる御家は雨が降れ共雨おちせず風が吹く共寶風吹いていよう春風ヨこちらへ吹いては御萬歳、萬歳樂まで祝ふて千秋萬知るよをとり來榮へ賜ふは誠に目出度く候へける。これからそろろ御萬歳をや萬歳、エ、萬歳オヤ萬歳エエ萬歳、萬歳樂で御悦びださん度なア、三度づるが舞いにと仇な舞に取りはす昔又アハ……後白河の法皇様の御時にコレハイ熊の山へ御代參の折からにコレハイ諸太夫の装束で左折の烏帽子にてコレハイ其時は京都迄上りてい大内の御門かやコレハイお江戸サアへ下りて將軍様の御門かやコレハイ旦那様の御門と三福は一對にてコレハイ元日にいさぎよく開くやきり、オヤさらりエエさらりオヤさらり、さアらりさつと才藏開いたハ……開いたり開いたりはたけたり出雲様の御身代は大きな物だにでつかいものだにコレハイ又もとりては目出度い物が參る何が、參る御悦びの大判や小判がコレハイ佐渡で湧いた金かやお江戸で出來た金かや旦那様へにくいヤレさい、にやさくらニやさくらへ、さ



くらニヤさらこれさまの御座敷に柱取りが始る子供衆  
 も油断するなもつこをしよこない米だにコレハイ太夫さ  
 んあけないぜにや金がわくよふにコレハイ木だちをもつ  
 たらすくいこめ升を持つたらはかり込めコレハイ美しい  
 姉様にや才藏なんぞも内證でなら五兩や三兩いさつくれ  
 べにコレハイそこらの姉様のほんぼの通りやお花の通り  
 おでぐらでんの出べその近所へハ……まつちやよこく  
 べつちやらこ、萬ちやらこまんざらやぼていとぶした才  
 藏あらせまい代々榮へ御萬の長者なを萬歳樂までも、祝  
 ひおおてやんれげにや豊の時津風ふくや千秋とくいのに  
 萬歳樂とぞ候へける。



先代萩  
①

伽羅先代萩

御殿の段  
政岡忠義の段

御殿の段  
政岡忠義の段

人形役

乳一鶴妻妻榮女  
母千政子喜  
岡松君沙井八沖御小  
醫

吉田文郎	桐竹文郎	吉田文郎	吉田文郎	吉田文郎	豊竹清太郎	豊竹清太郎	豊竹清太郎	鶴澤重部太夫	鶴澤重部太夫	鶴澤重部太夫	鶴澤重部太夫
枝郎	助吉	文五	文五	文五	太郎	太郎	太郎	太夫	太夫	太夫	太夫
枝郎	助吉	文五	文五	文五	太郎	太郎	太郎	太夫	太夫	太夫	太夫

人口に膾炙されて居る點でも、この淨瑠璃は今日流行の曲目中屈指の作であります。伊達騒動を脚色した戯曲の中では最も有名な作品で、作者には松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の名が見え、天明五年（二四四五）江戸の結城座の勾欄にかゝつて居ります。

全編九段仕立て、第一が舟岡山、躑躅山、第二が伊達義綱上屋敷門外、第三が貝田屋敷、第四が浮世渡平住家、豆腐屋、第五が近江堅田浦、道行、第六が御殿、第七が明衛屋敷の上使、第八が定倉屋敷、第九が對決になつて居り、中にも六つ目の竹の間から政岡の飯焚き、千松殺しが有名なことは云ふまでもない。

梗概

奥州五十四郡の城主伊達義綱は江戸の吉原の傾





城高尾太夫に溺れ、國政を顧みない所から、奸臣仁木彈正はじめ悪人一黨は公儀へも憚りありと義綱を隠居させ、幼君一人のお家横領を企てゝ居た。

幼君の名は鶴喜代君と云つた。乳母政岡は幼君を守つて居たが、彈正はじめその一黨の奸策は幼君の身に迫つて居た。幼君毒殺の計が着々とすゝめられて居るのを政岡は知つて居た。それ故、幼君のたべ物もすべて御殿で自ら炊いて差上げて居た。もう一時も油斷のならない状態だつたのである。

政岡には一子千松と云ふものがあつた。千松は鶴喜代君のお相手役として御殿へ上つて居た。

今日も御殿で千松が、侍の子はひもじいめをするのが忠義、食べる時は毒でも何でもお主の爲にはたべる、と云ふのを聞いて我が子ながら健氣なものよと涙ぐんだのであつた。

政岡がいつもの様に幼君の御膳を拵へて居る間

千松は雀の唄を歌つて幼君の御機嫌をとつて居た。縁先に出した雀の籠には親雀が餌をはこんで居る。これを見た鶴喜代君は、雀がうらやましくてならなかつた。そして又、御膳の残りを頂くのがこの上なくしあはせに見えるのだつた。政岡はこの様子を見るにつけ、聞くにつけ若君のお身の上にて涙をしぼる他なかつた。

やがて御膳も出來た。千松の毒味に喜んで握飯をたべる鶴喜代君の心根を政岡は勿體ないものと思つた。

折から梶原様の奥方御入りなり、と云ふ聲に、政岡はこれを訝しんだ。何はともあれお通し申せと千松にはいつもの事を云ひ含めて奥へやつた。やがてしとくと一と間へ通つたのは榮御前、政岡はじめ沖の井八汐もこれを出むかへた。

榮御前は夫梶原に代つて鶴喜代君の病氣見舞に來たのだつた。それに持參の菓子折は頼朝公より

の下され物と云ふのだつた。

榮も八汐も曲者、彈正一味の何を企んで居るか知れない人物だつた。榮持參の菓子折を八汐は引取つて早速鶴喜代に獎め様とした。何と云つても頑はない幼君はこれに手を出さうとするので政岡は押し止めた。

傲慢な榮は、頼朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて食べさせぬ、是非ともこの榮が食べさせる、と強引である。政岡もこれにははたと當惑した。頼朝公の仰せと云つて押つける榮に何と云つてよいか返答に窮してしまつた。

其處へ奥から走つて出た千松は、その菓子欲しいと云ふなり掴んで口へ入れた。八汐も榮も驚くうちに千松は七轉八倒、果してそれは毒を仕込んだ菓子だつたのである。八汐はすかさず千松の首筋引寄せて懐劍で突きさした。そして、お上へ對し慮外の千松この通りと、なぶり殺しにするのだつた。

政岡はちつと堪らへて居た。これでもかくと云ふ八汐に又別の奸計のあるのを見抜いて居たからである。

一同を別間へ引取らせた榮は政岡に事のたくみの始終を明し、悠々と歸つて行つた。榮は政岡がてつきり同腹中の者と思ひ込んだのである。それは、最前八汐が殺した千松は實はとりかへ子の鶴喜代だと思つたのであつた。

榮を見送つた政岡ははじめて我に返つた。そして慘らしく殺された千松の死骸を抱きしめ、その忠義を讃め、又幼君の御武運を守る神佛に謝した我が子の殺される様を涙一つ見せず堪へた政岡の心情は忠義の塊りであつたが、今は母として前後亂れて泣き叫ぶ政岡だつた。



情

太 大 美 醜

釣

釣 人 冠 女 形

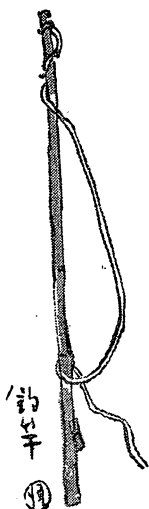
者 名 女 女

太 郎 冠 者  
大 美 女  
名 女

女

吉 吉 吉  
桐 吉 田  
竹 田 田  
紋 文 玉 榮  
十 文 玉 榮  
郎 作 幸 三

割 鶴 鶴 野 野 鶴 野 竹 竹 豊 竹  
澤 澤 澤 澤 澤 本 本 竹 本  
友 清 吉 吉 重 吉 伊 雛 呂 相 生  
衛 五 達 太 太 夫 夫 夫  
門 友 季 左 造 郎 夫 夫 夫



釣 子 ①

釣つり

(床本) 釣

女

女をんな

抑是は猿樂の昔よりして其業の可笑といひし狂言師名に大藏や鷲流の容を寫す 釣女 かやうに候者は此所の大名でござる。ヤイ〜太郎冠者あるか。ハア。有るかハア御まへに。居たか。ハア。ねんのう早かつた汝も知る如く此年迄定まる妻がない承れば西の宮の恵比壽三郎殿は福者と申事是へ参り妻を申受けうと存ずるが何んとあるぞ汝供をせい。誠に仰せの如くでござる西の宮のきびす三郎殿へ参るがよぶござりませう、私も定まり妻がござりませぬ次手ながら申受ませう。扱〜己はそつじな事をいふものじやゑびす三郎殿とこそいへきびす三郎と申事があるものではない。ハテ繪にかいた折はゑびす三郎と申す木で造つた折は木びす三郎と申ます。なう〜汝は物知りでおじやる、某は道不案内じや程に名所舊蹟を語り聞せよ。畏つてござる。去らば急いで参まうサア〜来い〜。参ります〜。イヤなう〜頼ふだ



お方先參る程に是がはや小唄に諷ふ奈良法師行も戻るも  
 心のとまるも山崎のく女郎と凜檠の長形結ぶ縁しの尼  
 が崎。アハ、ヤ面白くシテ向ふに見ゆる山は何  
 山じゃ。ハテあれは山でござる。爰な申か山は山じゃや  
 何と申。ハ、ア何山はエ、山でござるヲ、それく、あ  
 んの山からこんの山へ飛で出たるは何者ぞ頭にふつふと  
 ニツ細ふて長ふてりんとはねたをちゆつとすいた、兎  
 じゃ。何を申ぞシテ西の宮はまだか。最早此森の内でご  
 ざります。去らば參詣を致そうてうずく。ハア。先  
 鰐口に取りつかふぢやぐわんくいかに申上候、我此年  
 迄無妻なり。三郎殿の利益にて定まる妻をさづけたまへ  
 授けたまへと一心こめて伏拜む。ヤイ太郎冠者汝もおが  
 め。畏つてござるぢやぐわんくいかに木比壽三郎殿へ  
 申候、我も定まる妻はなし似合相應美しき妻をお授け  
 くくと三拜九拜したりける。ヤイ太郎冠者今宵は通夜を  
 せう汝もまどろめ。畏つてござる。アラとうとやく、  
 内陣の内ぞゆかしき我妻を千代と契らん手枕の袖を覆ふ  
 てまどろみしがほどもあらせず夢さめて、ヤイくお告  
 があつたく汝が妻になる者は西の門の一の階にあらう

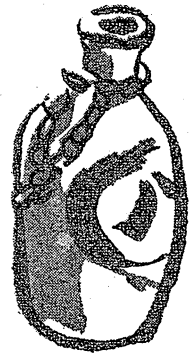


程に連て歸れとお告が。是はいかな事私がお告も其通り  
いそいで參らう。參ります。勇み悦ぶ足元に落  
たる竿を取上て、ヤこれはいかな事妻ではなふて竹の先  
に糸が附てあるこれはなんであらうぞ。ハアふしぎなお  
告でござりますな。イヤ是はさとつた惠比壽殿はふだん  
釣竿を放さず釣斗りしてござるによつて此針で妻をつれ  
といふ事であらう、先急いで釣ませうエイ、釣ろよ  
神の教への釣針をおろしめよき妻をつらうよ  
針をおろせば、針をおろせば、ヤイ、太郎冠者か、つ  
たわ。何か、逆も、おもい女ぢやチ  
ヤツト來て腰を取れ。心得ました。ハアテそれがしては  
ないお妻さんの腰を取れ。心得てござる。ふしぎやな氣  
高き女を釣上て、アラ有難や扱も能い妻がか、つてござ  
るうれしや。何が扱お悦びでござる。これ、そなたは  
定まる妻じやによつて目を掛けてやる程に夫を大事にしま  
せうぞヤ小野の小町か楊貴妃かアラ美しや。イヤゆ  
く道々こつそり樂まうと春中へ入て來た此吸筒お二人さ  
まの三々九度はにて目出たう御祝言。ヤこれは一段の事  
じや、サア、つげ。心得てござる。先女子の方よ

りさしませい。心得ました。申我夫必ず見すて、下さる  
な。なんの見すて、よひものか。ヲ、嬉し。太郎冠者祝  
して一ツうたふてくれ。畏つて候、高砂や此盃が二世の  
縁神の御前で祝言は三郎さまがお媒人よしそれとても浮  
氣心が有ならほんに罰が當るであるぞいな、必ず見捨て  
下さるな、やいのと寄添ば、傍に聞居る太郎冠者氣  
をのみあせり、ヤ申、其釣竿を私にお貸下され見事釣  
て見ませう。早ふつれ。イヤ釣る段ではござらぬ  
まづお二人様はそれにて御見物下さりませマツ、  
エイ、釣ろよ、釣る物は何々鯛に鯉に惠方棚  
に撞鐘信田の森の狐にあらぬ釣針をさげておろして二十  
二箱揃ふた十七八を釣ろよおかつさんをつらうよ。餘  
念もながき鼻の下、ヲ、當るぞ、どつこいメたと引上  
れば被衣目深にかつぎし女アラとうとや掛つたい、サ  
ア、こちらへござれ嬉しや、サア、是からは三  
々九度の盃じやこれへござれ何も恥しい事はないそなた  
と夫婦になるならば春は花見夏は涼み秋は月見の酒盛に  
冬は雪見のちん、鴨天にあらば比翼の鳥地に又あらば  
連理の枝かならずそまじはかはるまいな。なんの變つて

よいものかな。サテもよい妻を釣た物かなヤイ、太郎冠者此兩人のお妻様に汝が國の舟歌を歌つて聞かしてやれ。畏まつてござる。次手に手振りもして見せい。ヤア心得ました、沖で峰見りや三上の櫻とサ、枝をこんきりこつと、どうらんに付て忍び殿様にぶらゝんと提げさせふかいな、花にようにたサモ風俗はようそろ、そつとせいなびかんせ。サテ、面白い事ぢやヤイ、太郎冠者汝が妻も被衣を取らしませ。なにがさて餘りの嬉しさに顔を見る事を忘れておりました、サラバ一寸と御面像を被衣をとればこはいかに鯨に等しき醜女ゆゑ、ヤアワゴリヨは鬼か化物かなう消てなくなれ。なう、我夫今おつしやつた樂しみは嬉しふて、わたしや忘れはせぬわいなア。ヤレ情ないゆるいてくれ。そりやつれなひぞへ太郎冠者どの。コレとつちら向んせエ、何じやいなア、思へば深い戀の淵しづむ我身を釣糸に結んだ縁の西の宮蛭子まうけて二世三世かはらぬ色は棹竹の末葉榮ゆる夫婦中放れはせじと取すが。なう恐ろしや、ヤイ太郎冠者三郎殿の授たまひし妻じやによつて否應はなるまいぞ。ア、そなた様は良い月日の下でお産れ相

成た此太郎冠者は月も日もなく黒闇でうまれたと見へます。何は兎もあれ目出たふ舞ふではないか。勝手にさつしやれ。高砂や此浦船に帆をあげて、月諸共に舞の袖、女蝶男蝶の中もよく遠く鳴尾の沖の石堅い契りは住吉の千代に八千代をかけはしや千秋萬歳の千箱の玉を奉る目出たさよ。目出たいな。ヘンお目出たふござります。某しが妻は何處へ參つたアレ、太郎冠者が身共の妻を連れて行きをる、アノこゝな、おちやく者。ナニ太郎冠者が美しい女を連れて居たとナへ、腹立やくいさいてやる。あのこゝなおちやく者やるまいぞ。くいさいてやる。やるまいぞ。くいさいてやる。



義士銘々傳

赤垣出立の段

赤垣出立の段

切竹本津太夫  
鶴澤寛治郎

人形役割

赤垣出立の段

赤垣源藏	吉田榮三
兄源左衛門	桐竹門造
兄嫁おつき	桐竹政龜
母眞弓	吉田文五郎
下男會平太	吉田玉徳

この淨瑠璃は慶應年間に倉田千雨が書き下ろしたと傳へられてゐる。赤穂浪士の一人赤垣源藏が愈々吉良邸へ討入りする當日雪の朝、兄源左衛門の許へ今生の暇乞ひに行き、病中の母にも餘所乍ら訣別をするが源藏の本心を見抜いた老母は自ら咽を突き以つて後顧の憂を断つて源藏に存分の働きの出来る様にし、その門出を勵ますと云ふ一段で、忠義にあつき赤穂浪士に絡まる悲壯なる一挿話である。

梗概

降り積つた雪の中を、酔に寒さも苦にならぬ赤垣源藏が、刀の下緒にぶら／＼と酒徳利を括り付け、千鳥足の上機嫌で兄源左衛門の邸を訪ねて来た。相も變らず今日もいたく酩酊の様子――。

若黨曾平太は源藏の姿を見咎めて、「御舎兄源左衛門様は劔術御指南の御家柄、數多の御門弟で御繁昌、それに引きかへ貴方様は御浪人故とは申乍らこの御見苦しい御様子は……」と切りに諫言をする。然し源藏は一向に取り合はず果ては大聲でどなりつけるのだつた。

聲をきゝつけて玄關に出て來たのは兄嫁お繼。源藏の身なりを見るとこの寒中に襦袢も着けず小袖一つ。見るに見兼ねて綿入羽織を與へる親切。源藏は以前も衣服を恵まれたが、直ぐに酒に代へてしまつたのだつた。

衣服を着換へた源藏は、兼ねて病中の老母を見舞ひに奥へ通る。

源藏の今日の訪れは、今宵に迫つた吉良邸討入りに先立つて、餘所乍ら病中の老母や兄夫婦にこの世の暇を取らんが爲めだつた。

今日を限りの對面とは思つたが殊更顔には出さず源藏は母の前に兩手をつき、「此度朋友の推舉

により主取りして遠國へ旅立つことになつた」と話す。母はさうと聞くより佛間を開き、故主冷光院殿吹毛玄利大居士の位牌を出して二君に仕へる事をなじり教訓する。源藏はそれも空吹く風と聞き流して取り合はない。母は怒りの聲と共に隔の襖を立て切る。

源藏は徳利を引き寄せて飲み、其座に大の字に寝てしまつた。お繼は何とも詞もない様子。

折から一間より兄源左衛門手槍を引提げて「不忠不義の源藏を成敗せん」と、無二無三に突いてかゝると、源藏はむつくと起上つて受けつ潜りつ遂に徳利を以つて槍を押へ、どれお暇と立ち上る。母は「源藏待て、成敗せん」と刀を抜き放つて一間を躍り出でると見えたががばと刃を我が咽に突き立てた。ハツと驚く源藏兄弟お繼の三人。

母は源藏に向ひ、「親子一世の暇乞に來たのであらう。その様な心根でまさかの時にこの母に心引かれ、未練な働きのない様に、愛情を斷つ爲め





の我が自害、手柄がさせたい許りぢや」と苦しい息の下から叫ぶ。源左衛門も「母人の御明察に違ひあるまい。この上は母が冥途の土産に誠の心を明して呉れ」と源藏に頼む。——今は何を包まうぞと、源藏は今宵に迫つた義士四十七人の大望を語る。

この様子を立聞いた曾平太——それは吉良方の間者尾林平太だつた。この由を吉良上野様へ注進せんと駆け出すのを源藏は手練の槍先にかけ門出の血祭りに上げる。この槍こそ赤垣家先祖傳來の業物。兄は饒別にとそれを源藏に與へるのだつた。折から時計は亥の上刻を知らず。源藏は勇み立ち、納戸の疊を引き上げて菰包を切りほどけば、兼ねて用意の太刀、物の具、小具足類。威风凛然たる身拵しらひがたちどころに整つた。老母は喜びの笑顔を名残りに息絶える。今は思ひ残すこともない源藏は、颯爽として忠義の道を一筋に雪を蹴立て、吉良の邸へ討入るのだつた。





おちさの  
片袖  
(13)

辨慶上使の段

豊竹古鞆太夫  
鶴澤清 六

人形役割

腰	卿	腰	妻	侍	女	武	辨
		元	花	從	房	藏	慶
	の	し	の	太	お	坊	上
		の	の	わ	わ	辨	使
元	君	ぶ	井	郎	さ	慶	の
							段
大	桐	吉	吉	桐	吉	吉	
	竹	田	田	竹	田	田	
ぜ	紋	榮	光	門	文	玉	
		三	之	造	五	藏	
い	司	郎	助		郎		

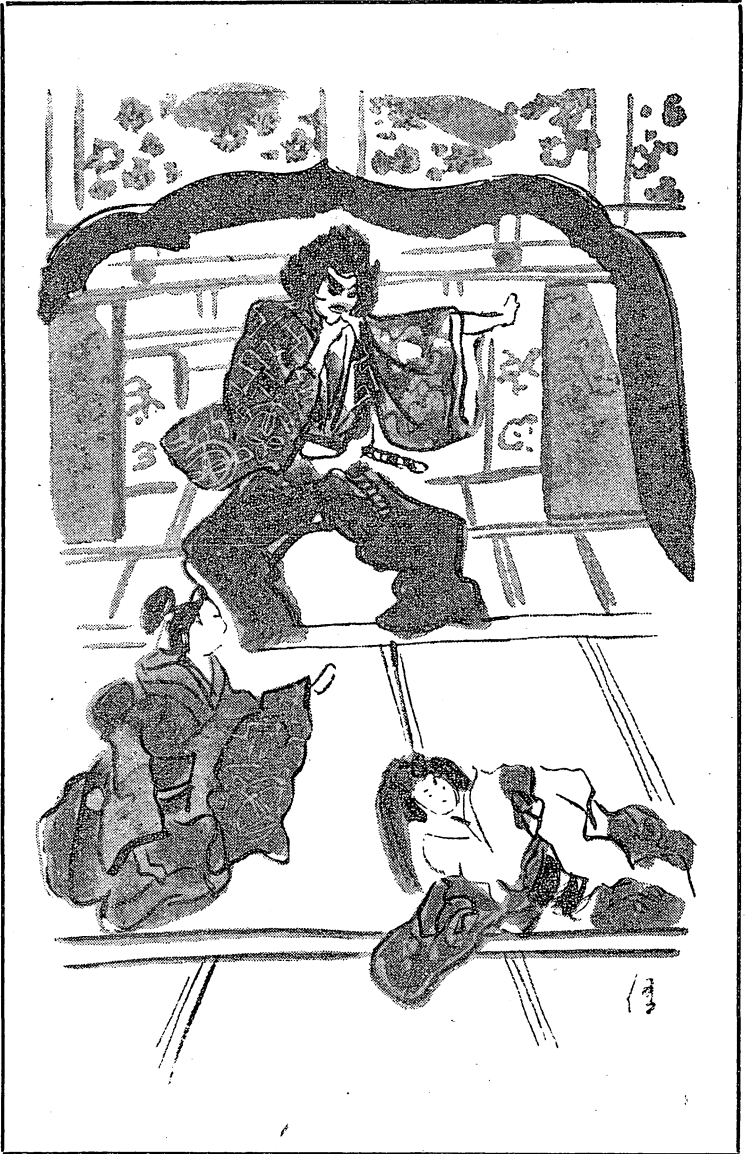
御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

元文二年(二三九七)一月竹本座に上場された文耕堂三好松洛の合作になり、全五段ものでこの「辨慶上使」は第三段目に當る。作全體の内容は、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が源義經の間罪使となつて上洛する。梶原は義經を陥れて己れの非を蔽はんとすの魂膽、土佐坊は是を知つて、義經を庇護せんとの心、かくて二人の入洛によつて、義經主従とこの二人の間に様々の葛藤波瀾を起すと云ふ筋立てである。

梗概

ここは侍従太郎と呼ぶ人の館である。この侍従太郎と云ふのは平朝臣時忠卿の執權職で、時忠の姫君で今は義經公の北の方の卿の君の乳人である卿の君は義經公の胤を宿して懐胎中なので、保養を兼ねてこの侍従太郎の館で假居をして居るので



ある。

丁度、義經は平家を滅して堀川御所に飛ぶ鳥も落す勢ひであつた。義經の兄頼朝は生來疑ひ深い質で、義經が平家方たる時忠卿の娘卿の君と結婚したのが若しや自分に謀叛でも起す下心からではないかと不審を感じその申し開きには卿の君の首を打つて差出せとの難題を云ひかける。そしてこの侍従太郎の館へその首を受取りに武慶坊辨慶を寄越すことになつた。

卿の君は太郎の毒花の井、腰元しのぶや久し振りで訪ねて來たその母親おわさの中に大勢の腰元共と打ち興じてゐた折、辨慶がこの館へ現はれたのである。

そして何か重大な要件でもあるのか、辨慶は太郎夫婦共々奥の間へ——。續いて卿の君、腰元共も。

後にはおわさとしのぶが懐かしげに親子相逢ふ歡びに浸つてゐた。

しばらくして、浮かぬ様子の侍従太郎と毒花の井が現はれ、おわさに向ひ今日の辨慶が上使の仔細を語りきかす。辨慶が今日の役目は卿の君の首を打つことであるがそれは忍びない。誰か身代りでもと云ふので考へ付いたは腰元しのぶ、年頃と云ひ器量と云ひ、首打つて頼朝公に卿の君の御首と云つて渡しても疑はれまい、何卒しのぶの命を主の身代りに貰ひ度いと無理な頼み。

然し、おわさはそれを拒絶する。しのぶは主のためだから死ぬといふ。そこでおわさはしのぶを殺す事の出來ない譯があるとて、自分の左の肌を脱いで振袖の片端を出し、十八年以前、頃は夜も長月の廿六夜の月待ちの夜、二八餘りの稚兒姿の知らぬ男と契つた物語をし、「假り寝の情は淺けれど、妹脊の縁や深かりけん……」その月より身も重く、産落したのがこの娘しのぶで、今日まで母娘が憂き苦しみも、如何かして知らぬ父に娘を逢はしたくその夜のかたみのこの振袖を便りに父

親を探してゐるとの涙の述懐。

おわさが語り終つて娘を連れて立たうとした時突然障子越しに刀が突き出て娘しのぶの脊中を抉る。皆がアツと驚く途端、奥正面より今日の上使

武藏坊辨慶が、黒地に輪寶の模様の大紋を着て、血刀を掲げて悠然と立出る。これはと驚く皆の眞

中にどつかと座した辨慶は、「是には深い仔細のある事、これ見よ」と我が身の片肌を脱ぐ——と

これは意外、おわさがかたみの振袖と對の模様の紅の大振袖の伊達模様、十八年前におわさが假寢

の契を交した稚兒播州書寫山の鬼若丸、おわさが多年尋ねる戀しい夫、しのぶが片時も忘れ兼ねた

險の父こそ、この武藏坊辨慶であつた。

辨慶は、しのぶは自分の娘だから主君の身代りにするのだと話す。

おわさは始めて總べてを納得したが、手負のしのぶは委細も知らず現在生みの父親の手に掛つて

息絶える。

おわさはしのぶの死骸に取り付いての愁嘆——

流石に辨慶も父として名乗りもせず我が手に愛し娘の命を奪つたことの悲しく、

「生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が卅餘年の溜涙一度に亂すぞ果しなき……」

と泣きに泣き入る。

やゝあつて時計の音。

辨慶は心を取り直し侍従太郎に娘の首を討つて渡せと云ふ。太郎はしのぶの首を落とすと直ぐに自分も切腹し、卿の君の乳人侍従太郎の首を添へて

差出せばよもや質首とは誰も思ふまいと云つて死ぬ。

辨慶も成程と領づき太郎が首を打ち、二つの首を白布に包んで左と右に抱きかゝへ、

「卿の君の御首、侍従太郎の首諸共、武藏坊確に取つた——」

と呼ばはり、おわさ、花の井の名残りを惜しむを振捨て、堀川御所へ歸へつて行く……。





淡路町 龜屋内の段

前 竹本 文字太夫  
 豊 澤 新左衛門  
 後 竹本 大隅太夫  
 豊 澤 廣 助

羽織 落しの段

竹本源 太夫  
 野澤吉 彌

梅川 忠兵衛  
 冥途の飛脚

淡路町 龜屋内の段  
 羽織 落しの段

作者は近松門左衛門、寶永八年（二三七一）三月大阪の竹本座に初演された上中下三卷の世話物淨瑠璃であります。

上の巻が今回上演の龜屋内から羽織落し、中の巻が同じく新町封印切、下の巻が新口村になつて居りますが、その後安永二年に菅專助や若竹箆射によつて改作された「けいせい戀飛脚」の方が流行し、「戀飛脚大和往来」の外題で行はれて居る新口村は、この改作の方であります。

梗概

大阪淡路町の飛脚屋龜屋の忠兵衛は至つて律氣な男だつた。大和の新口村の百姓孫右衛門の子だつたけれど、實の母に死に別れてから、龜屋の

人形役割

龜屋内より羽織落しの段

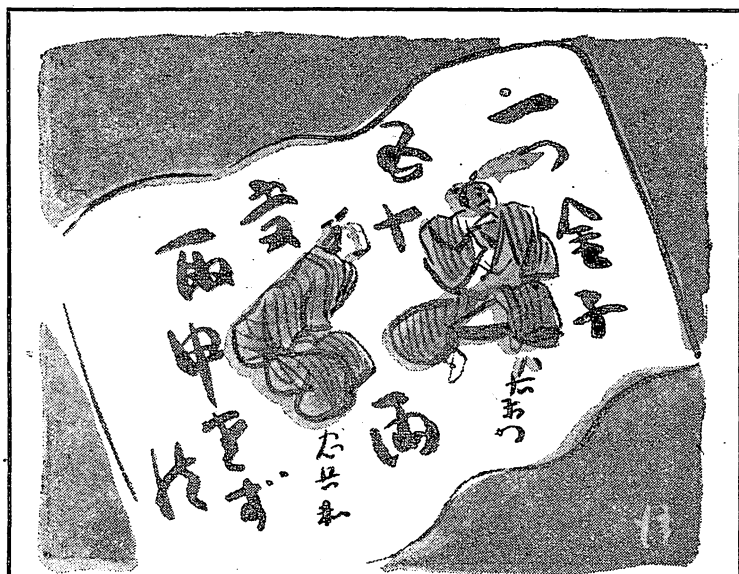
龜屋	忠兵衛	吉田	榮三
母	妙閑	吉田	小兵吉
丹波屋	八右衛門	吉田	玉幸
下女	おまん	桐竹	紋太郎
手代	伊兵衛	吉田	玉市
山田	甚内	吉田	玉徳
八右衛門	の使	吉田	兵次
宰	領	吉田	多三郎
馬	方	吉田	利男
仲	仕	大	ぜい

後家妙閑の養子に迎へられたのだつた。

ふとしたことから新町の槌屋の梅川と馴染む様になつてから、忠兵衛はぬけられない深みへ入つてしまつた。日々稼業には江戸大阪をかけて何千兩と云ふ大金を扱つて居た忠兵衛であつたが、おのれの身代としてさう金がつゞく譯はなかつた。義母妙閑も、此の頃の一向家に落ちつかない忠兵衛を心もとないものに思つて居た。

今日も中の島の丹波屋から、江戸から届いた筈の五十兩ばかりの爲替銀の催促に來たのに、金が着いてから十日も経つのに未だその金を渡さぬ忠兵衛を妙閑は怪しまないでは居られなかつた。

日も暮れる頃、忠兵衛は新町の灯を胸に描きながら我が家の門口に立つた、思へば先だつてある田舎客に受け出されるときまつた梅川の爲、丹波屋の爲替五十兩を融通して、やつと身請を止めた忠兵衛だつた。母親の手前言ひつくるふ術もなし丹波屋へ金を渡す日限は來て居り、我が身から出



たこと乍らほとく當惑してゐた。

其處へ來たのは丹波屋の八右衛門だつた。金の催促をする八右衛門に忠兵衛はことの譯を打明けた。そして四五日待つて呉れれば又あてもあると話すので、八右衛門も友達甲斐に云ひにくいことをよく打明けて呉れたと納得するのだつた。

家の中から母親が二人を呼び込むので詮方なく八右衛門も妙閑に會つた。妙閑は爲替の金を直ぐ八右衛門に渡す様しきりに忠兵衛に云ふのだつたが、その金は無いとも云へず、氣を揉んだ揚句、苦しい智慧を絞り出した。忠兵衛が金包みと見せて妙閑の目の前で八右衛門に渡したのは、鬘水入れだつた。八右衛門も妙閑の無筆を知つて居たから、良い加減の請取りを書いて忠兵衛に渡して置いた。何も知らぬ妙閑はそれで安心したのでつた。

八右衛門が歸つたあと馬の鈴音もけたましく龜屋へは江戸から金が到着した。この中で三百兩

今夜にも堂島の屋敷へ届けなければならぬ金があつた。忠兵衛は取りあへずその封金を懷中に羽織の紐も結ぶや結ばず外へ出た。

外は霜夜だつた。梅川の居る新町の方へ何時か忠兵衛の足は向いて居た。ふと氣がついて見ると堂島とは正反對の米屋町まで来て居た。梅川の顔は見て行きたし、大事の金は懷中にあり、しばらくは肩の羽織のづり落ちるのも氣付かずためらつたが、いつそ一寸だけ、と忠兵衛は新町の方へ馳つたのであつた。



袋



大阪地方海軍人事部指導

軍國 かはつてなまほんさいはくのてがみ  
 美談 代唱 萬歲母書簡

第一場 ○○海軍航空隊

第二場 山内海軍中尉留守宅

第三場 海軍省人事局

母の書簡

清	水	局	長	豊	竹	和	泉	太	夫
山内	海軍	中尉	母	竹	本	南	部	太	夫
多	田	課	長	竹	本	陸	路	太	夫
紳			士	竹	本	播	路	太	夫
山内	中尉	妹	智	惠	子	竹	本	津	磨
同	弟	敏	夫	竹	本	叶	美	太	夫
山内	海軍	中尉		竹	本	さ	の	太	夫
司	令		官	竹	本	津	の	子	太
				野	澤	勝	平		
				鶴	澤	友	造		
				鶴	澤	友	三		
				鶴	澤	友	郎		

(床本) 母の書簡

海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の爲には何か惜しからん、棄てゝかひある命ぞと、遠き神代の昔より、承け傳へたる武夫の、武勇の血こそ尊けれ。

爰に昭和十二年、排日毎日に血迷へる、暴逆支那軍膺懲の、軍は遂に擴がりて、國際都市の上海に、斷乎起ちたる我海軍、陸戦隊は寡兵もて、よく大軍を支へしが、敵の飛行機襲來して、多くの民を殺傷す。無道極まる支那空軍、いつかは撃滅せんものと、待ちにぞ待ちし時來る、八月十五日夜を籠めて、忽ち起る不時呼集、行く手はいづこ敵の首都、南京方面爆撃の、重大使命ぞ下りたる。○○海軍航空隊、第一陣に選ばれし、山内吉田梅林

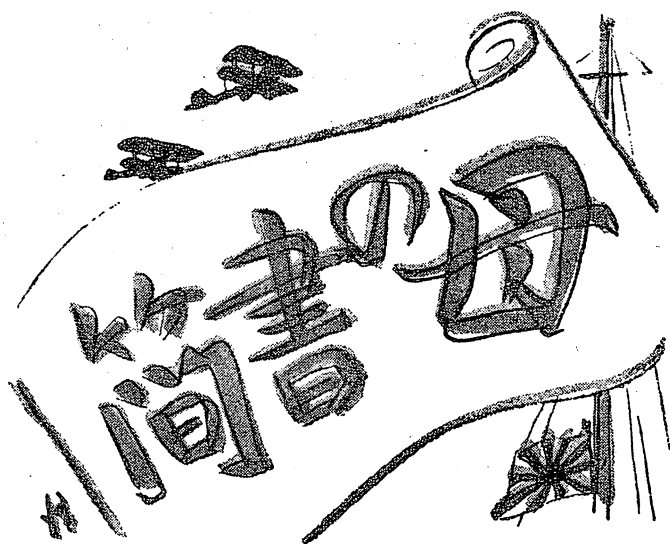
母の書簡 役

山内中尉	吉田中尉	南野中尉	梅林中尉	渡邊中尉	太田中尉	司官	紳士	母ヤス子	妹智恵子	弟敏夫	清水局長	多田課長
吉田光之助	桐竹門造	吉田玉幸	吉田文作	吉田文二	桐竹太一郎	吉田玉市	桐竹政龜	桐竹紋十郎	桐竹紋十郎	吉田榮三郎	吉田榮三	吉田玉藏

野澤勝 芳  
 鶴澤綱 延  
 鶴澤徳 若

南野其外渡邊太田、意氣軒昂たる勇士達、場内せましと居並らんだり。號令臺に〇〇司令、一々見守り居たりしが、嚴肅に詞をかけ「落下傘はどうした。誰も用意をして居らぬ様だが」と訝かしげに尋ねれば、山内中尉進み出で「敵地での不時着に、落下傘の必要はありません。萬一の場合には、機體諸共突入して、敵を壊滅せずには置かぬ覺悟で有ます」「うんよく言つてくれた。其覺悟だ。

大元帥陛下の御爲、全國民の爲、立派に命を棄て、くれ其強い覺悟の前には、いかなる困難も切り開かれる。後には神も佑けます。本職は、諸士が必ずや使命を達成するものと信ずる。決死の意氣込の上に、更に細心の注意と、大膽なる判断とを望む。では勇ましく出發してくれ」「はい、では往つて參ります。各々部署に附け」「部下の技倆は信ずれど、戦史に會つて例しなき、この荒下に幾千軒、支那海越えて行く部隊。あはれ幾機か歸還せん。ただ空襲の目的を、はたしてくれよ爲遂げよと、暫し見守る其内に、エンジンの音勇ましく、心ときめく折しもあれ、滑走一機二機三機、續いて離陸五機六機。頼



むぞ頼むぞ」と呼ぶ聲は、聞えはせねど手を高く、舉げて見送る司令幕僚、姿も淡く朝顔に、消えて早くも海の上、物凄まじき颱風の、中心近く轟々と逆巻く大波大嵐海面すれすれ七十米、雲の間をくぐりつ縫ひつ、まつしぐらににぞ廻り行く。

長崎の山から出ずる月はよか、こんげん月はえつとなかばい。蜀山人が詠じけん、こゝ長崎の片ほとり、彦山の麓新中川町。立待月は中空に、見る人もなく澄み渡り宵の曇さもをさまる夜更け鋪石の道登り来る、音も静かに一人の紳士、山内達雄とある表札見出で、「山内様のお宅は此方でございますか。役所から参りました」と訪ねば、内より、「まあお役所から今時分、何の御用でございますませう。只今お開け致します。まあ何卒お上り下さいませ」夜分にお騒がせ申しまして、誠に恐れ入ります。あなた様が山内中尉殿の、お母様でございますか御本籍地壹岐の國へ、海軍省から参つた電報が廻送されて参りました。實は」とばかり言ひさして、後は言ひ兼ね口籠る。様子見て取り、「何、それでは悴が戦死した

とのお知らせでございますか。夜分のところ様々のお知らせ  
 ませ泰う存じます」と騒がぬ母親。「誠にお氣の毒で、  
 申上げる詞もございません。御子息中尉殿には、去る十  
 五日南京空襲部隊に参加せられ、爆撃任務御遂行の上、  
 御歸還の途中御行方知れず、立派な戦死を遂げられたと  
 認められるとの御事、お國の爲とはいひながら、母御様  
 のお心の内、お察し申上げます」と言ふを打消しやす子  
 刀自。「いゝえ何の、其お悔みに及びませう。あの子を  
 軍人にさし出した上は、命はお國に捧げたもの、お國の  
 爲に力を盡し、立派な戦死を遂げたのなら、私は嬉しう  
 ございます。死んだあの子の父親も、草葉の蔭で嘸やさ  
 ぞ、満足に思うて居りませう、達雄の父は長い間、小學  
 校の校長を、勤めさせて戴きました。ほんにお國を思  
 ふ心の深い人でありました。私は決して歎きは致しませ  
 ん」とけなげに言へば、「いや何と申し上げませう。見  
 事なお心がけ、餘りの氣高いお心に、男の私さへついで  
 がこぼれます。それではこれでお暇申します。どうぞお  
 心静かに」と挨拶もいとねんごろに歸り行く。隣の部屋  
 に聞く娘、弟も共に立出でて、「お母様達雄兄さんが」  
 「智恵子、海軍省からの御通知、立派な兄さんをもつて

お前達も肩身が廣いといふもの。兄さんに負けぬ、立派  
 な人とならねばなりません。のう敏夫」「でも行方不明  
 といふのでせう。僕は兄さんは、未だ何處かに生きてお  
 いでなさる様に思ふ。是迄一度だつて間違ひの無かつた  
 兄さん。あれだけ自信のあつた兄さん、どこかの山の中  
 にも生きて居なさるのではないか知ら」「いゝえ、あ  
 の雄々しい氣象の達雄です。見事に戦死した事だせう」  
 「でもあの元氣な兄さんのお姿に、再びお逢ひ出來ぬか  
 と思へば、私は悲しうございます」「いゝえいゝえ泣いては  
 なりませぬ。海軍航空隊の度々の爆撃、味方にも損害が  
 有つたと聞いて達雄が若しやと氣がかりで有りましたが  
 このお知らせを受けまして、私は不思議に落着く事が出  
 來ました。あの子は死んでも、決してむだには死にませ  
 ん。魂はきつと生きて居ります。其證據に斯う私の心が  
 強くしつかりとなれたのも、あの子の魂の生きて居る證  
 です。いついつ迄も魂は生きて、きつとお國を護るでせ  
 う」「兄さんやつぱり死んだかなあ。新聞で見れば、あ  
 の日は猛烈な低氣壓で、南京地方が颱風の中心だつたの  
 だ。空襲部隊の中、僅か八機しか損害が無かつたのは、  
 全く奇蹟と書いてあつた。兄さんと同じ、神戸高等商船



學校出身の梅林中尉が、墜落しながらハンカチを振つて僚機に別れを告げたとか、南野中尉が墜落しつゝ正確に爆弾を投下して、愛機はガンリントンタンクに突入したとかいろいろ勇ましい様子が傳へられるのに、兄さんは、兄さんは。僕は夫れが残念だ」「いゝえそれも考へ様です私は達雄を信じます。大きな評判を取る取らぬ、夫れは問題ではありません。戦ひの蔭には、縁の下の力持ちをなさる方が、どれだけ居られる事です。あの度々の爆撃に、機關の故障が一度も無いといふのも、地上部隊の整備員の方々が、どれ程御苦勞なさる事です。それを思へば達雄等、いさぎよい空襲部隊に、参加させて戴いて、どれ位仕合せか分りません。お國に盡す心は一つ。ただ最後の際、

天皇陛下の萬歳を、唱へるひまもなきまゝに、墜ちていつた事でせう。其時の達雄の心、さぞ心残りです。うと、此の事だけが氣になつて」と思はづ落す露の玉。「あゝもう夜も更ける。あなた方もおやすみなさい。私はこちらから、海軍省の方々へ、お禮の手紙をしたゝめませう」「夫れではおかあ様、お先へ御免下さいませ」「かあ様お先へ」とそれぞれに、寢所にこそは入りけり。

後に母親たゞ一人、神の御前に燈明かゝげ、父の御靈に手を合せ、「達雄は、常々の御教訓通りお國の爲、立派な働きをして、あなたのお側へ参りました。褒めてやつて下さいませ」と暫し禱りを捧げし後、机に向ひ、墨すりおろし、萬物寂として寢しづまる、深夜に心を澄ませつゝ、一書をこそはしたゝめけり。

日支戦端開けしより、晝夜暇なき海軍省、人事局の局長室、朝まだきより清水局長、山と積みたる書類をば、檢する折から入來る課長「多田君、何事か急な事件が起つたかな」「いや、只今参つた手紙を調べてをりますと去る十五日南京渡洋爆撃に、行方不明、戦死と決定した山内中尉の母親からの書面、軍國の母の志、讀んで一同泣かされました。餘り感激しましたので、局長閣下にも御覽に入れようと、持参しました」「ほう山内中尉の母御から。そこで讀んで聞せてくれ給へ」「では讀んで見ませう。前の方は略します。山内達雄中尉儀、南京空襲においてぼつせる旨の御通知、壹岐郡石田村村長殿より現住所宛御轉送を得、まさに拜承仕候。あの子が光輝あ

る帝國海軍航空士官として、御奉公仕候事を得、決死もつて護國の鬼と化し、搖ぎなき祖國の御爲に、生命を捧げまつる事を得候事、尊く感謝に堪へず候。謹みてかの子既往の事、深く厚く御禮申上げ奉り候。あの子は幼少の時より、直く正しく清き心の持主にて、武勇を好める性質なれば、必ずや天に受くる大任ある者と信じ候て、父は賤しき己が子なりと思はず、御國の御子なりとして育くみ養育致し來りたる子に有之候。昭和九年祖國非常時に心を澄し候て、海軍旗のもとにはせ參り候時、既に此最期を明かに決意仕り居りたるものに有之候。

天皇陛下萬歳、大日本帝國萬歳、大日本帝國海軍萬歳、戦死せる子達雄に代り、母やす謹みて唱へ奉る」「君一寸待つてくれ給へ。子に代つて、

天皇陛下の萬歳を唱へると云ふのか。其後は吾輩に讀ませよ。何々。大日本帝國海軍萬歳。戦死せる子達雄に代り、母やす謹みて唱へ奉る。あゝ老い行く母、月の明るきを眺めては泣かんとするか。花の香ばしきをめでては惱まんとするや。あらず首べをあげて空行く飛行機を見よ。あれよあの機。達雄永へに生きて在るよ。私なほ男兒三人有之、育て見守りつゝ御國の御爲に勵ましめんと

致候。達雄最期といへ共、帝國軍人としての面目はけがさぬ性格に有之候故、御心安く思し召し下さいませ。達雄母やす謹みて上。海軍省人事局御中。誠に立派な志だ。吾輩は心から感激した。これは我々ばかりが讀んだでは濟まぬ。廣く新聞紙上に發表して、此の感激を國民全般に分たう」「ハイ、一同もさう申して居ります」「是非さうしよう。小學校の讀本にも出て居る、日清戦争の時には水兵の母、日露戦役の時には、一大郎の母があつた。こんな立派な母親は、山内中尉の母御ばかりでは有るまい。恐らく軍人の母親は、皆同じ心に感じるであらう、子を育て子を守るのが母の勤め、子を先立てゝ何んで悲しうなからうぞ。月花を見て惱むまじ、泣くまじと云ふ母の心、さすがに女の優しさよ。深い愁ひを堪へ忍ぶ、限らない悲しみだおつかさんは泣かずとも、此手紙を讀む國民が、代りに泣いてくれようぞ。お國の爲と云ふならば、その愛し子の戦死さへ、惜まぬのみか三人の、残る子迄も捧げんと誓ふ心の尊さ。此心こそ日本の誇り。大日本帝國萬歳。傳へ聞きたる人々は、戦の場につづ者も、銃後の守りにある者も、皆諸共に奮ひ起ち、一つ心に東洋の、平和の爲の大御軍、勝たて止まじと誓ひなむ、勝たて止まじと誓ひなむ。



13

# 佐 和 利 集

## 御殿の段

ドレこしらへうとかい立つて、かたへに飾る黒棚より取出す錦の袋物風爐にかけたる茶飯釜の、湯の試みを千松に、飲さす茶碗も樂ならで、お末が業を信樂や、いつ水さしを炊桶流す涙の水こぼし、心も清き洗ひ米、釜にうつして風爐の炭、直してあぶぐ扇さへ、骨も碎くる思ひなり

聞く悲しさをこらへ兼ね、ムお道理ちや／＼、日本國の其中に、幾億萬と限りなき、人の果報を受け給ひ

五十四郡の御主と、榮耀榮華は上もなき、何暗からぬ御身に思ひがけなき御辛抱、たとへ賤しい下々でもかう云ふ事があるものか、ましてついに見も聞きも、涙ながらに政岡が申す事とおとなしう、聞入給ふいたはしや、現在御内の御家來が、邪非道に組従ひ、殺害せんとこの工とは知つたる故にかけみに添ひ、おまめな御身を御病氣と、世間を偽りどうよくに、稚い御身に朝夕さへ思ふ様に上げぬ故、鳥獸の餌ばむのを羨しがるお詞は、御尤もお道理共、云ふに云はれぬ御身の因果、雀や犬に劣

つたる、宮仕へして忠義ぢやと、云はれう物かと喰しぼり、胸に煮立つ風爐先の屏風にひしと身をよせて、奥をはゞかる忍び泣き。

## 政岡忠義の段

そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を固めさす誠に國の礎ぞや、とは云ふ物の可愛やな、君の御爲かねてより覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしい者の手にかゝつても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房連の刃にかゝり、鬪り殺しを現在に傍に見て居る母が氣は、何の様にあらう、どうあらう、思ひ廻せば此ほどから、謳ふた歌に千松が、七つ八つから釜山へ、一年待て共まだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬ、と歌の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔を見せる事もある、

同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて何の便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰ふなと云ふて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ様な胸慾非道な母親が、又と一人あるものか、武士の種に生れたは果報か因果か、いぢらしや、死ぬるを忠義と云ふ事は、いつの世からの慣習しぞと、こりかたまりし鐵石心、道女の愚に返り人目なければ伏轉び死骸にひつしと抱きつき前後不覺に歎きしは、理り過ぎて道理なり。

### 赤垣出立の段

降り埋む雪の野山と人心餘所目にそれと白砂の、道踏み分くる千鳥足酔に寒さも苦にならず、顔も赤垣源

藏が刀の下緒にぶら／＼と、括り付たる酒徳利、酒故に身も破れ笠、

聞くより母は這ひ寄つて佛間を開き、コリヤ源藏。アノ上垣の御位牌

冷光院殿吹毛玄利大居士此御法名。

よもや忘れはせまいがの。今更改めて言ふには及ばねど其方は。十二歳の時御縁あつて赤穂の殿様へ御奉公幼少より二親の手を離れソレ其様に成長して身に餘る御知行を下され譜代恩顧の歴々の衆と肩を並べしはサ誰が蔭なるぞや。ア、恐れ乍ら淺野内匠守さま。思ひも寄らぬ去年の騒動。吉良上野が爲にやみ／＼と御切腹。一家中は浪人して散り／＼ば

ら／＼去ながら御家老始め忠義の義士。御鬱憤を晴し奉る企は有そような物と。そちが歸るを明暮待ち兼しに

戻つた日から酒の所望。酔ぬ日もなく打て變りし其身持。コハ心得ずと思ひしが。イヤ所存あつての。酒狂かと。意見もせず捨置しは親の慾目。日増に募る放埒情弱御先祖傳來の刀まで賣拂ひ剩へ大病の母を捨て家出せし不孝者めが／＼。まだその上に侍にあるまじき。二君に仕へて手柄願。見下げ果た人外めと。にらむ眼にはら／＼と口惜し涙いとゞ猶痰火は胸にせきのばせば。お繼も何と取りなさん。詞も涙先立て。春撫でおろす許なり。

ヤレ待て源藏用が有と刀を杖によろほひ出で。重々の不届母が手討覺悟せよと。刀をすらりと抜はなす。コハ危やと止る嫁。振り放し振り放し源藏目がけ寄るぞと見えしが。我

と我咽にがばと突立てたり。なふ何故の御自害とお繼は驚き兄弟も。おろく立寄り介抱す。母は苦しき息を繼ぎ。是には深い仔細あり。コリヤ源藏今日そちが來たは敵討の門出親子一世の暇乞でサ有ふがな。アイヤそれはイ、ヤ隠すまい隠すまい。大望に加擔せし身を以て。暇乞に來る様な狼狽な根性ではまさかの時此の母に心引れ。未練な働あらんかと愛情を斷つ我自害。老さらばうて惜からぬ。此身を捨ては其方に。手柄がさせたい計ぞや。

### 辯慶上使の段

扱是は御夫婦への咄しではない、後學の爲卿の君様へ御物がたり、ア、惣じて勇士の戰場へ趣く時は三忘と申て忘るゝ事三つ有、まづ國を出る時、家をわすれ、境を過る時妻子

を忘れ、敵陣に臨んでは我身を忘るゝ、婦人の懐胎も先其如く、既に月滿、御産のひもを解るゝは彼勇士の敵陣へかけ入て是ぞ能敵ござなれ、遁すまじと引組で首を取るか取らるゝか、よい子を産むか得産ぬか、生るか死ぬるか、生死の境が爰をよく御合點なされ、かねてなき身と思召さば、其期に臨んで不覺をとらぬ、ヤ拍子に乗つて馬鹿な事を、ハ、ハ、ハ、

なふコレ待て下さりませ、偽り者と云れては親故此子の道立ず、顔もしらず、名もしらぬ、夫を尋るしるしは、是と上の一重を押脱ば、右はかはらぬ詰袖に、左ばかりは振袖の濃紅の染模様、橘ならぬ袖の香の昔床しく忍ばしく、娘が聞前恥かしき

昔咄し、私元は播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ、私が父母、十八年以前、頃は夜も長月の、廿六夜の月待の夜、數多泊りの其中に二八餘りの稚兒すがた、こつちに思へば其人もすれつもつれつ相生の松と松との若みどり、露の契りが縁のはしヲ、恥かしやつい、暗りの轉び寝につらや人の足音に戀人も驚きて、起行く袂ひかゆるを、振切急ぎ行く拍子、ちぎれて我手に残りしは此振袖かり寝の情は淺けれども、妹春の縁や深かりけん、其月より身も重く、懐胎し、後にて何と詮方も、産落せしは此信夫、縁あればこそ子迄もふけしもの、此振袖をしるべにて、再び尋逢んと國を出て拾七年、水子をかゝへさまゝとさまよひめぐりしうき艱難、今に尋逢ね共女の念力、是

こそは娘よ父よと名乗合するそれ迄は、身にもかへぬ大事の娘、お役に立ぬは右の譯、卑怯未練でない申し譯、娘にはどふぞお隙を下さりませ

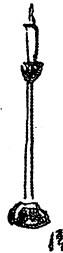
### 淡路町の段

身をつくし、難波に咲や此花の里は三筋に町の名も佐渡と越後の合の手を通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年廿のうへはまだ四年以前に大和より敷金もつて養子分後家妙閑の介抱ゆへ、商ひ巧者駄荷積江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧、碁双六、のべに書く手の角取て、酒も三つ四ついつ所紋羽二重も出ずゐらず無地の丸鍔象眼の國細工にはまれ男色の譯しり里知て暮るを待はず飛足の飛脚宿のいそがしき、荷を造るやらほどくやら、手代は帳面、算盤を奥口ともにとやくと、千萬兩のや

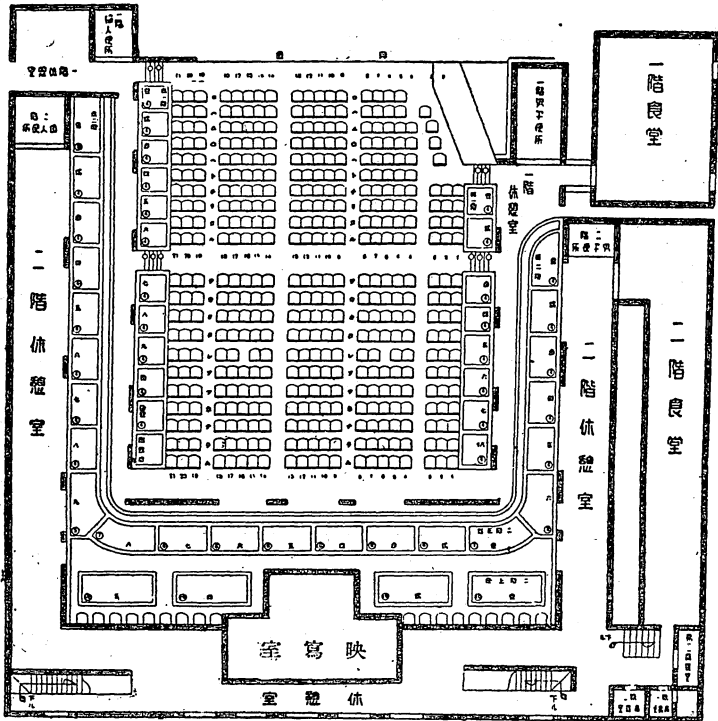
りくりもつくし東の取りやりも居ながら金の自由さは一步小判や白銀に翅の有が如くなり、

### 羽織落しの段

金懷中に羽織の紐、結ぶ、霜夜の門の口、出馴し足のくせになり心は北へ行くくと思ひながらも身は南西横堀をうかくと氣にしみ付し妓が事、米屋町まで歩み來て、ヤア是はしたり堂島のおやしきへ行筈、狐が化すか南無三寶と引返しが、ム、我知ず爰まで來たは、梅川が用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄て顔見てからと立歸つては、イヤ大事、此金持てば遣ひたからふ、おいてくれふか、往てのけふか、エ行もせいと、一度は思案二度は不思議、三度飛脚戻れば合せて六道の冥途の飛脚と。



# 文樂座御場席案内



御観覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符。壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座みます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席。三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

# お正月の芝居案内

川湊戸神 場劇竹松 <small>四〇四四川奏話電</small>	條四都京 座 南 <small>五五一一圓紙話電</small>	堀 嶺 道 座 角 <small>二一二二南話電</small>	堀 嶺 道 座 中 <small>九七二一南話電</small>	阪 大 座伎舞歌 <small>六二八二戎話電</small>
日初旦元 演開時十晝 半時四夜	日初旦元 幕開時三日每	日初旦元 部二午正晝 毎 演開時五夜 日	日初旦元 開二午正晝 毎 演部時五夜 日	日初旦元 演開時正晝 毎 時五夜 日
新 舊 大 合 同 劇	當る初春興行 東 京 新 派 大 合 同	躍進日本の新年を壽ぐ 精 銳 大 歌 舞 伎 二部興行	古典味豊かな 吉 例 大 歌 舞 伎 二部興行	吉例初春公演 松 竹 家 庭 劇
第 第 第 三 二 一 一 土 岩 本 本 本 刀 刀 刀 土 土 土 儀 儀 儀 入 入 入	第 第 第 第 四 三 二 一 日 天 あ 難 本 高 じ 民 橋 本 き ろ 行	待 元 本 宵 祿 朝 小 忠 廿 室 臣 四 節 藏 孝 鏡 浪 修 獅 花 禪 子 女 語	か 春 繪 桔 吉 本 梗 縁 太 太 橋 功 籬 岡 本 記 舉 漁 源 天 村 平 一 曙 布 夜 瀧 引 部 瀧 瀧 部 坊	第 第 第 第 五 四 三 二 門 防 夫 お 出 犯 婦 さ の 當 協 ん 盃 番 力 の 後 姿 婿
一 二 三 等 等 等 席 席 席 一 八 五 間 十 十 十 十 十 (税別)	一 二 三 四 五 等 等 等 等 席 席 席 席 三 二 一 一 五 間 間 間 十 十 十 十 十 (税別)	特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 席 席 席 席 二 二 一 一 八 五 間 間 間 間 十 十 十 十 十 十 十 十 (税別)	特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 席 席 席 席 二 二 一 一 八 五 間 間 間 間 十 十 十 十 十 十 十 十 (税別)	一 二 三 菊 櫻 等 等 等 席 席 席 席 二 一 一 八 五 間 間 十 十 十 十 十 十 (税別)



# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

## 當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の形形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

## 文樂座人形淨瑠璃は

當に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居ります。尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

## 御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

## 貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

## お煙草は

一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

## お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ります。

## 賣店は

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

## お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

## 場内にて

寫眞撮影は絶對にお断り致します。

## 御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上りする事に致しました。御一報次第御上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

鳥江 鏡也

大阪市内區久左衛門町八番地

大阪市内區西區土佐通一丁目十二

印刷所 永井日英堂印刷所

昭和十五年十二月廿一日印刷

昭和十六年一月一日發行

發行所 松竹株式會社大阪支店

發行所 大阪市内區久左衛門町八番地

發行所 松竹株式會社大阪支店

發行所 大阪市内區西區土佐通一丁目十二

一部 金二十錢

# 文樂座南一食堂

賜命下御に前慕一は用御の事食御  
すまい座御で利便御極至はれは

(てま時八らか時五)間時事食御

大坂四ツ槁

# 南温泉料理

御宴會にも  
御家族連にも

電話南  
①⑤

一	一	一	一	七
三	三	三	三	〇
三	三	三	三	
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

